

ご案内

金継ぎ つぎのばでは、本漆・純金をはじめ、すべて自然の材料を使用し、日本古来の手法による金継ぎをご指導いたします。

今回開講するのは、初級コースとして、欠け・ホツレ、ひびの修復を体験していただける講座です。

5回に渡る講座では、繕い前の処理からはじまり、固め漆、砥の粉を使った錆漆作りと欠けへの充填、砥草による研磨、下地漆塗り、漆研ぎ、金粉蒔きと、金継ぎの基本的な技法を丁寧にじっくりとご指導いたします。また座学では、金継ぎの歴史や漆をはじめとする材料に関する講義も行います。

漆を使って繕うことが日本で始まってから数千、万年。それは金継ぎという技法として洗練され、日本文化を形作る漆工芸という支柱を背景に今日まで継承されてきました。

季節や天気の変化を感じ、漆の力に委ねながらゆっくりゆったり繕う。ご自身の手で器を繕うを通して、漆のことを知りながら、大切な器が再び日常に還る過程を楽しんでいただければ幸いです。

対 象：本漆を使った伝統的な金継ぎを体験してみたい方、自分の手で大切な器を修復したい方、楽しく手習を行いたい方。

※本講座は自分の手で器を繕い、手仕事を楽しむ講座です。プロ（講師・職人）の育成を行うものではありません。

日 時：2023年6月4日（日）、7月2日（日）、8月6日（日）、9月3日（日）、10月8日（日）
13時00分～（各回2時間から2時間半程度）

※段階を追って作業を進めていくため、全ての回に参加する必要があります。

場 所：Studio798（世田谷区深沢798）

費 用：計 25,500円（内訳：受講料・筆・材料・消耗品費等 24,500円、テキスト代 1,000円）

※仕上げの金粉、銀粉は別途費用。（参考：金粉 0.1g 1,600円、銀粉 1.0g 1,000円）

持ち物：□お直ししたい器 5点程度（ご持参いただいた器の中から3点ほどを選んでお直しします）

※ 陶器または磁器のもの。

※ 浅い欠け、もしくはひびがあるもの。

※ もしも油汚れがある場合は、食器用洗剤で汚れをよく落としてきてください。

※ 過去に器を漂白剤などに浸けたことがある場合は、水に一晩浸け置きし塩素等の成分を完全に抜いてきてください。また、しっかりと乾かしてきてください。

※ ご自身で壊れた器を多くお持ちでない場合は、ご家族やお友達などにお声がけいただき、お集めいただきますようお願いいたします。

※ 割れたものは初級コースではお直しできません。（割れや大きな欠損の修復に取り組める中級講座については、講座時にご案内させていただきます）

□ニトリル手袋（医療用使い捨てタイプ） □アームカバー □エプロン □筆記用具

□作業途中の器を持ち帰る箱（段ボール箱、菓子箱、木箱、プラケース等）

内 容： 6月 4日 講義と木地固め
7月 2日 錆漆作り（砥の粉と水、漆を練って作る）と欠けへの充填
8月 6日 砥草による錆漆の研磨、下地漆塗り
9月 3日 金粉蒔き
10月 8日 金粉蒔き後の器の掃除、質疑応答等

定 員：10名程度（先着順。定員に達し次第募集を締め切ります）

講 師：圖子愛子（ずし・あいこ）

一般社団法人 国際金継ぎ師協会 認定講師

大学・大学院にて芸術学を専攻、東京都図画工作科専科教員として勤務したのち、金継ぎ師の古屋容子氏に師事し金継ぎを学ぶ。

2019年よりイタリア・トリノ市で暮らす。

同地で器の修復の依頼を受けるようになり、現地の方に金継ぎ教室を行う。

2021年10月より、櫻日伊文化交流協会（イタリア・トリノ市）金継ぎ講座講師。

現在は浜松市に在住、金継ぎによる器の修復と講座を行う。

- ※ 本講座は、一般社団法人 国際金継ぎ師協会の「金継ぎ初級講座」の内容に従って実施されます。
- ※ 材料となる漆を硬化前に直接触れるとかぶれ等アレルギー反応を起こす場合があります。安全指導・管理は徹底致しますが、万一アレルギーが起きた場合、また怪我等が生じた場合、一般社団法人 国際金継ぎ師協会、金継ぎつぎのぼ及び講師、Studio798 及び講座主催者は責任を一切負いません。ご承知いただける方のみご参加ください。またアレルギーを防止するために、首元が隠れる服装で参加されることをお勧めいたします。
- ※ 参加費用は講座初日に全額お支払いいただきます。不参加の日程がある場合の返金は致しません。予めご了承ください。

お問い合わせ・申込：

Studio798 松井淳子

Mail: matsui@executivepress.jp

金継ぎ つぎのぼ 圖子愛子（ずし・あいこ）

Mail: kintsugi.aikozushi@gmail.com

Tel: 080-1188-6689

HP: <https://www.kintsugiaikozushi.com>



漆でなおすということ

金継ぎ（金繕い）は、器の割れや欠けを漆で繋ぎ埋め、金粉を蒔いて仕上げる修復技法です。

金粉の代わりに銀粉を使い仕上げたものは「銀継ぎ」、色漆を使って仕上げたものは「漆継ぎ（漆繕い）」とといいます。

漆を使った修復は、古くは縄文時代から見られます。遺跡から発掘された土器には、漆による塗りが施されたものや、漆を接着剤として修復がなされた器があります。

室町時代になると、蒔絵など漆を使用する工芸技術の高まりと、傷跡さえもその器の個性として受け入れるという茶道精神の拡がり、漆によって修復された器に芸術的価値を見出すこととなりました。

そして現在、金継ぎは日本のみならず世界で注目されています。

金継ぎでは、「漆の木」の樹液である漆、そして米粉や麦粉、砥の粉や木の粉など、すべて自然のものを材料として使います。そのため、金継ぎで修復された器は、再び飲食に使用することができます。私は、ただ形だけ直して煌びやかに見せるだけでなく、漆を使って直すことで、器本来の用途を取り戻し、また日常で使えることが、金継ぎの醍醐味であり美しさであると考えます。

また、漆だからこそできる修繕・表現があります。

器の作り手、持ち主、そしてその器自体への敬意を持って繕うことが、金継ぎを行う上で重要なことです。器本来のよさや愛着を大切に、繕ったところがその器に馴染み新たな調和・景色となるように繕うことを常に心がけています。そのためには、多彩な漆工芸の技法を駆使し、器の表情に適した表現をすることが不可欠なのです。

本来であれば欠点であるはずのひびや欠け、割れ跡などの傷でさえも、器の個性として楽しみ味わう。そして、日々の生活の中でもう一度使っていく。

金継ぎを通して、大切なものを、時間を越えて長く大切に使うことの豊かさ、と素晴らしさを感じてほしいと思います。

圖子愛子

